

ブ ッ ク ・ レ ビ ュ ー

小野木祥之 著

偏芯してますか、ご同輩

—日本的経営とのつきあい方—

読後の感想を簡潔に述べるならば、本書は、労働・労働者・労働組合にかかわる「労働運動の哲学」を確認しようとする率直な、そして個性的な意志表明の書である、ということになるであろう。会社の論理のまえに「労働者がかけろのように消え」てしまうのでもなく、「会社のことなんか知るもんかと、労働者がつっぱる状態」だけでもない、「企業とは少し軸芯をずらしたものの考え方」をもって「偏芯に生きる」労働者・労働組合のありようを確立する——これが本書の主題である。会社の論理に翻弄されることにさしたる異議申し立てもしないことに馴れてしまったかみえる「純粋資本主義」社会の住人たちにたいして、本書の発するメッセージはどこまで届くであろうか。

さて、このメッセージの立脚点は「労働」への徹底した執着である。「労働者が一生のうちかなりの時間をすごす職場は、たんにより高い賃金やより短い仕事時間にだけ関心をよせる場ではない。仕事の中身そのものにおいて、どう自分を表現し、主張するかを日々思いめぐらせているはずである、わが身に照らしてみても」。「労働者はいい仕事をしたい。意義ある仕事に打ち込むことで自己実現を計りたいという願望をもってします。……その場合も……どっちに軸足を置いてやる自らの労働なのかが大事な分かれ目になります」。そして、「労働」そのものと労働組合との従来の関係性の問い直しが提起される。「その課題を組合がキチンとやってくんかったばかりに、ミスミス経営側に職場の専制支配を許し、同時に組合の人気をかくも惨めに凋落させることにもつながったのではないか」、すなわち「労働組合がちっとも仕事のなかに口をはさんでいかなのは……い

かんと、そういいたいんです」というわけである。

こうして最終的には「己の仕事の主人公になる」ことが「焦眉の課題」とされる。ここまできると、「日本的経営とのつきあい方」をすでに超えて独自に「労働者が主人公となる」ことを自己の課題とする労働者協同組合運動の「哲学」との距離は近い。一読をすすめるゆえんである。

(評者・内山哲朗)

(B 6判・220頁、定価1750円、91年5月刊、筑摩書房)

小磯彰夫 著

富士銀行行員の記録

銀行はどうなっているのか

銀行・証券業界の不祥事が発覚してその体質が社会的指弾を浴びている状況のなか、富士銀行現職役員による銀行労働の実態を描いた両書はきわめてタイムリーである。

両書を読むと、銀行の裏面を晒し出すような役員によるトラブルがいわば〈構造化〉されている事情すなわちノルマ主義・預金獲得競争・高密度の行内労働・出世競争等々による労働者そして職場の疲弊が浮かびあがってくる。「この近代日本において、戦前の軍機のごとくなんでも秘密という社会が銀行なのである。まさに社会から隔離された職場なのである。だから、職場は放っておけば無法地帯となる。日本経済発展の基幹的役割を負っている都市銀行内部の前近代的様相は、そのまま日本経済の内実をあらわしてはいまいか」。こうした「前近代的」業界体質のもと、「人間の犠牲の上に立った利潤追求だけ」が跋扈するのはなにも銀行だけに限ったことではないとしても、両書に描かれたそれは、あらためて数字至上主義の凄しさを伝えている。

「潤いもゆとりもないところには良識ある判断

も、行員一人ひとりの向上もない。高い目標達成のためには社会常識さえ邪魔になる」といった銀行における「人間性喪失の歴史」にたいする「告発」が個人の声から集団の声へと繋がれていくにあたり、問われるべき一つは、ここでもやはり労働組合である。（評者・内山哲朗）
前著（B 6判・200頁、定価1339円、91年9月刊、晩聲社☎03-3255-0030）、後著（B 6判・204頁、定価1339円、91年11月刊、晩聲社）

柳田大元 著
アラスカ最底辺

数年前、ヴァルラフ著『最底辺』（岩波書店）という本がでた。これから紹介しようとする書物は、この『最底辺』のアラスカ版だと、さしあたりは言えるかもしれない。しかし、内容はかなり違う。前者は西ドイツで働くトルコ人等外国人労働者をあつかったものだが、後者はアラスカ土着の少数民族を主題としたものである。

アメリカでは現在、ホームレス・ピープルが急増している。それは各主要都市で1日ごとに増えつづけており、後を絶たないホームレスを収容する施設として「シェルター」が、また彼らに食事を支給する場所として「スープキッチン」が配置され、その数はアメリカ全土で数百にのぼるといふ。

著者は、こうした「シェルター」のひとつ、アラスカ州アンカレッジ市の収容所に1986年から88年にかけて7ヶ月間にわたって自らすすんでホームレスの1人として住みこみ、アラスカ最底辺の人々と暮らしを共にした。アラスカ土着人の上に数百年ものあいだ重くのしかかってきた収奪、掠奪、搾取。これは現在も続けられている。合衆国政府やアラスカ州政府、あるいは大企業群に、ほとんどの利権を奪われ、土地を奪われ、仕事を奪われ、暮らしをこわされ、かすかな希望をもってアンカレッジを訪れては、なすすべもなく社会のどん底たる浮浪者貧民収容所に流れ込む彼ら。怒りと絶望から昼間から飲んだくれ、あるいは泥棒

稼業に打ちこむ彼ら。仲間同士ではげしくいがみあいながら、暖かさのひとかけらもない身のけもよだつ冷たい収容所に超人的な忍耐で耐え、耐えながらやさしく助けあう彼ら。著者は彼らを暖い目でえがきながら、えがくことによって、いまのアメリカ社会を鋭く告発する土着人の怒りを表現することに成功している。

土着人の怒りは日本人にもむけられる。著者と会話していた土着人の女性がなにげなく「どこから来たの」とたずねた。著者はなにげなく「日本から」と答えた。するとそれまで温和な顔つきで笑顔を混ぜながら話をしていた彼女は急に表情を強ばらせ著者を睨みつけた。

「日本人……、日本人は私たちの仲間を虐殺したじゃない。わたしたちは一度だって日本人にひどいことをしたことはないのに、あんたらはやったじゃないの！」

彼女の顔はみるみるうちに憎悪に燃えた形相に変わっていった。彼女が言っていたのは第2次大戦中のことだった。日本軍は1942年6月4日アリューシャン列島のグッチハーバ、次いで7日にはキスカ島を、8日にはアッツ島を奇襲、占領した。その際、なんの関係もない住民を虐殺し、女性を強姦したのである。

アメリカのアカデミー賞映画「ダンス・ウィズ・ウォルプス」が日本でも若い人たちに大きな感動をもたらした。いま、先進資本主義国といわれる諸国のなかで、そこでの先住民に対するいわれなき抑圧が、人類全滅の危機の意識とともに、おおきな問題として浮上してきている。

日本人の贖罪の旅はさらに北方へと続けられなければならない。

おわりに、まだ20代という若い著者のスケールのおおきな「さすらい」に心から拍手をおくり、今後を期待したい。（評者・小西明）
（青峰社刊）